

教育研究業績書

2016年10月01日

所属：英語文化学科

資格：教授

氏名：前原 澄子

研究分野	研究内容のキーワード
英文学	エリザベス朝, 劇, ロマンズ, 祝祭, 騎士道, 宗教改革
学位	最終学歴
博士(文学), M.A. (Renaissance Studies), 修士(文学)	関西学院大学大学院 文学研究科 英文学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Festive Romances in Early Modern Drama: Nostalgia for Ancient Hospitality and Wish-fulfillment Fantasy in Mobile Society	単	2009年8月20日	関西学院大学出版会	英国エリザベス朝の現実社会で衰退の一途にあった民衆の祝祭が、様々な含意を伴ってロマンス劇に再現される点に着目し、それらの社会的・文化的意味を探ることを目的とする。ロマンス劇のドラマツルギーには、虚構と現実を併せ映す機能が備わっており、その祝祭表象も、単に劇世界の構成要素であるだけでなく、当時の社会的・文化的背景を巧みに映し出す機能を伴うことを明らかにする。
2 学位論文				
1. Festive Romances in Early Modern Drama: Nostalgia for Ancient Hospitality and Wish-fulfillment Fantasy in Mobile Society (博士論文)	単	2006年9月	関西学院大学	英国エリザベス朝の現実社会で衰退の一途にあった民衆の祝祭が、様々な含意を伴ってロマンス劇に再現される点に着目し、それらの社会的・文化的意味を探ることを目的とする。ロマンス劇のドラマツルギーには、虚構と現実を併せ映す機能が備わっており、その祝祭表象も、単に劇世界の構成要素であるだけでなく、当時の社会的・文化的背景を巧みに映し出す機能を伴うことを明らかにする。
2. The Jacobean Ideal Union and the Ancient British Myths Retold in Epics and Plays: Warner, Heywood, Drayton and Shakespeare (M.A. 論文)	単	1995年12月	The University of Reading in U.K.	1603年にイングランドの女王エリザベス1世が崩御し、その王位を継承したスコットランド王ジェームズ6世が最初に打ち出した、イングランドとスコットランドの平和的統合政策に焦点を当てる。両国の統合問題は、ジェームズ王の治世下において両国議会で最大の物議を醸し、同時代の文学作品に色濃く影響を残した。本論文では、統合問題に纏わる政治的・文化的コンテキストと同時代の文学作品の相互関連性を、広範な資料に基づき論証する。
3. King LearとCoriolanusにおける怒りの考察 (修士論文)	単	1993年3月	武庫川女子大学	シェイクスピアの『リア王』と『コリオレイナス』は、ともに傑出した主人公の怒りが悲劇を展開させる点において、『ホメロス』に代表される英雄悲劇の系譜に属するものと考えられる。また、肉親のつながりをクローズアップする筋書きにおいても、二つの悲劇には共通点が多く認められる。本論文では、それぞれの主人公の怒りを、「ことば」「権力」「自己」の3点からテキストに基づいて比較考察する。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
1. エリザベス朝散文から18世紀小説への展開—語り模索—	単	2015年3月	Mukogawa Literary Review No. 52, pp.1-11.	写実主義に貫かれた小説は、18世紀に新たに生み出された文学形式であり、それ以前の散文から発展したものではないとの見解が定説となっている。しかしながら、語り手の概念が明確に成立したのは19世紀であることを踏まえると、18世紀の小説における語りの工夫は、エリザベス朝の散文にその原初を見出すことができる。本論では、英国最古の書簡体小説をはじめ、John Lyly, Anthony Munday, Sir Philip Sidney, Thomas Nasheによる語りの模索が、17世紀のAphra Behenを経て、Daniel DefoeやHenry Fieldingの語りへつながることを検証する。
2. 『エドワード1世』における反グリゼルダ表象—エリザベス女王へのオマージュ—	単	2015年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 第62巻, pp.1-8.	ジョージ・ピールの『エドワード1世』において、王妃レオノールは残酷でプライドの高い悪女として登場する。こうした史実と異なる王妃の人物造形は、当時の英国における反スペイン感情を映し出すものと考えられてきた。しかしながら、王妃の自己主張の記号は一貫して贅沢な衣服であることに注目すると、王妃はグリゼルダのパロディーであった可能性が指摘される。さらに、当時の君主エリザベス女王がしばしばグリゼルダに喩えられたことを併せて考えると、本劇は晩年の女王エリザベスへのオマージュとして創作されたと結論することができる。
3. 17世紀ロンドンの大衆劇場における騎士道ロマンス—道化によるパーレスクの意味—	単	2014年3月	Mukogawa Literary Review No. 51, pp.1-11.	17世紀ロンドンの劇場で人気を博した騎士道ロマンス劇が当時のイングランドの新大陸への進出を寓意することは自明であるが、騎士道ロマンスの本筋が、道化の演じるパーレスクとパラレルをなす構造は注目に値する。本論では、3つの騎士道ロマンス劇、The Seven Champions of Christendom, Guy of Warwick, Tom a Lincolnに共通するこれらのパーレスクにどのような意味が込められていたのかを考察する。
4. ウィリアム・バードの楽譜出版におけるシドニー追悼	単	2010年12月	明石工業高等専門学校研究紀要 第53号 pp. 23-28.	1588年に書籍商Thomas Eastによって出版されたWilliam ByrdのPsalmes, Sonets and Songsは、詩篇10篇、ソネットまたは牧歌16篇、悲しみと敬虔なる歌7篇と、Sir Philip Sidneyを弔う歌2篇から構成される5声の合唱曲集の楽譜である。本論文では、これまでのシドニー追悼詩に関する研究を踏まえた上で、巻末の挽歌2篇がこの歌集全体においてどのような意味を持つかについて新たな見解を提示した。
5. The Old Wives Tale: 祝祭と諷刺	単	2006年3月	日本シェイクスピア協会 学会誌Shakespeare News 第45巻第3号 pp. 3-11.	16世紀末の英国で女王一座によって演じられたロマンス劇『老婆の昔噺』は、構成に一貫性がなく、統一的解釈が困難と見なされてきた。本論文では、この劇がクリスマスの夜噺であることに着目し、劇に散りばめられた雑多な要素が、祝祭という枠の中で統一性を与えられることを明らかにする。初演当時の観客にとって、クリスマス、農神祭、再生儀礼、施しといった文化的事象が一連のつながりをもって受容された可能性を、さまざまな資料を用いて論証する。
6. トマス・ナッシュの『夏の遺言』における施しのテーマ	単	2004年12月	明石工業高等専門学校研究紀要 第47号 pp. 123-127.	16世紀末に、英国のカンタベリー大司教の邸宅で催されたトマス・ナッシュの余興、『夏の遺言』に散見する祝祭表象の意味を分析する。従来、この作品は、宗教改革が進む中で弾圧された民衆の祝祭を擁護するものと解釈されてきた。しかしながら、テキストを子細に分析すると、劇のテーマは、祝祭そのものではなく、祝祭時のもてなしの習慣についての議論であることが明らかとなる。質素・儉約と勤勉を重んじるプロテスタント社会における祝祭の文化的意味を併せて考察する。
7. 『カリストとメリベー』のふたつの悲喜劇	単	2003年12月	明石工業高等専門学校研究紀要 第46号 pp. 139-142.	英国で約100年の時を隔てて出版されたふたつの悲喜劇、ジョン・ラステルの創作と推定される『カリストとメリベー』(c.1530)と、ジェームズ・マップによる翻訳『セレスティーナ』(1631)は、同一の原作に基づきながら、作風が大きく異なる。この相違を、当時の文化的背景に照らして考察する。さらに、英国の演劇が道徳劇の枠組みを脱して新しい喜劇へ発展していく過程を、ふたつの作劇を通して考察する。
8. Three Chronicle Epics in the Early Jacobean Context	単	2002年12月	明石工業高等専門学校研究紀要 第44号 pp. 131-139.	16世紀末から17世紀初頭にかけて英国で創作された3つの叙事詩、ウィリアム・ウォーナーの『アルビオンのイングランド』、トマス・ヘイウッドの『トロイア・ブリタニカ』、マイケル・ドレイトンの『ポリ・アルビオン』を考察する。いずれの詩にも、女王エリザベス1世へのノスタルジーと現王ジェームズ1世への間接的批判を読み取ることができる。また、これらの叙事詩が、当時の関心事であったブリテン帝国の成立についての文化的メッセージを含む点に着目し、当時の出版に関する検閲やメディアの在り方についても考察する。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
9. 『パリスの審判』をめぐる一考察	単	2000年11月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第43号 pp. 129-134.	ジョージ・ピールの『パリスの審判』は、16世紀英国の王室チャペル少年劇団によって御前上演された劇である。「パリスの審判」は、ルネッサンス期の詩や演劇にたびたび登場するモチーフであり、エリザベス朝の観客にとっては馴染み深い神話の題材であったことが想像される。本論文では、この劇が、当時の文化的潮流であったネオ・プラトニズムの「愛」と「貞潔」の概念構造をもつことを明らかにする。
10. 『冬物語』におけるロマンスのドラマトゥルギー：語りとスペクタクル	単	1999年2月	関西学院大学英米文学会 『英米文学』 第43巻第2号 pp. 15-27	シェイクスピアの後期の劇が「ロマンス」と呼ばれる最大のゆえんは、現実感と虚構性の混淆する特殊なメカニズムにある。『冬物語』におけるレオンテーズの嫉妬をめぐる心理的リアリズムの欠如・オートリカスの多義的表象・熊の場面ならびに彫像の場面における語りとスペクタクルの連携を例に、当時の文化芸術の潮流におけるこの劇の位置づけを考察する。
11. Britain in Shakespeare's Plays: King Lear and Henry V	単	1999年11月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第42号 pp. 151-158.	シェイクスピアの悲劇『リア王』は、ジェイムズ国王のブリテン統合政策が難航を極めた1606年の暮れに御前上演されたことが記録されている。王国の分割が悲劇を招く筋書きは、国王一座の座付作家であったシェイクスピアによって、ブリテン統合を目指すジェイムズ王へ送られた逆説的賛辞であったと解釈することができる。また、『ヘンリー5世』(1599)では、イングランド・ウェールズ・アイルランド・スコットランドの連合軍の場面が、国家の統合に伴う文化摩擦を象徴しており、ジェイムズ新王による統合問題を予言的に暗示するものであった可能性を考察する。
12. シェイクスピアのソネットにおけるeroticismのレトリック：“the Master Mistress of my passion”	単	1998年8月	Profectus No. 5, pp. 9-21.	シェイクスピアの『ソネット集』第1番から126番は、ある貴族の美青年にあてた愛の告白からなっており、ほぼ一連の作品とみなすことができる。これらにおいて、詩人が青年に捧げる愛をいかに解釈するかについては、従来から多くの議論が交わされてきた。とりわけ、本論考で取り上げる第20番は、過剰なまでの技巧がテキストの解釈を難解にしており、問題の作品として知られている。そこで、第20番でうたわれる愛のレトリックの重層的意味を、エリザベス朝における詩人とパトロンとの関係・当時の男性間の‘friendship’の問題・sequenceに共通する詩人・青年・女性の三角関係の力学と絡めて考察する。
13. Philasterにおける政治諷刺のカモフラージュ	単	1997年9月	関西学院大学人文学会 『人文論究』 第47巻第2号 pp. 133-144.	ボーモントとフレッチャーによる悲喜劇『フィラスター』には、同時代の劇作品『ハムレット』や『オセロー』からの借用が認められることが定説となっている。これらの借用が、フィラスターの人物像に及ぼす影響を明らかにするとともに、バーレスクという文学形態が、同時代の文化的・政治的コンテキストと、どのように関わりを持っていたかを考察する。
14. Dilemma between Obedience and Justice in Cymbeline	単	1997年5月	Profectus No. 4 pp. 15-31.	ShakespeareのCymbelineには、主君への忠誠とモラルの葛藤が、形を変えて繰り返し描かれる。ここでは、賢明な家臣の不服従は悲喜劇の枠内で円満に解決される。本論稿では、これらの葛藤がルネッサンスの社会的コンテキストを反映するものであったことを論証するとともに、この劇に描かれる喜劇的不服従の意味を考察する。
15. Thomas Campion's The Somerset Masque in the Context	単	1996年2月	Profectus No. 3 pp. 17-32.	1613年12月26日、ジェイムズ国王の御前で、Earl of SomersetとLady Francesの結婚式が華々しく執り行われた。その祝いの宴に、Thomas Campionは仮面劇を書くことを仰せつかる。ところが、これはFrancesの再婚であり、またHoward家の政治的野心を内因とするいわつくきの祭事であった。本論稿では、Campionの仮面劇が、この困難な状況をいかに巧みに曖昧化し、結婚称賛に置き換えているかを分析する。
16. Cymbeline in the Jacobean Context: The Meaning of the Happy Union	単	1996年11月	関西学院大学英米文学会 『英米文学』 第41巻第1号 pp. 61-75	シェイクスピアのロマンス劇は、再会と和解によるハッピー・エンディングを特徴とする。とりわけ、『シンベリン』の結末で謳われる「ブリテンの平和と豊饒」は、1603年に即位したジェイムズ一世が推し進めたイングランドとスコットランドの平和的統合政策を彷彿とさせる。本論文では、この劇の結末が、当時の文化的・政治的状況においていかなる意味を持ち得たかを、劇場および観客事情を踏まえた上で考察する。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. シェイクスピア劇の面白さ一言の魔術	単	2014年06月	武庫川女子大学春季英文学会講演会	生誕450年を迎える今もなお、シェイクスピアの劇は様々な翻案によって世界中で上演されている。しか

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
2. Anthony Mundayによる騎士道ロマ ンスの出版	単	2013年12月	於 武庫川女子大学 日本英文学会関西支部 第8回大会 於 龍谷大学大宮キャン パス	しながら、シェイクスピアが劇を書いた時代には、芝居は観るものではなく聴くものであった。白昼に屋根のない劇場で、嵐の海上や夜の暗闇を演出するには、すべての状況を言葉で説明する必要があったからである。講演では、『ロミオとジュリエット』のバルコニーの場面から有名なせりふを取り上げ、無韻詩のリズム、比喻の反復、イメージの連鎖等について解説した。 中世のスペインに由来する騎士道ロマンスAmadis de Gauleの物語は、16世紀末までにヨーロッパ各国で翻訳され、カトリックとプロテスタントの対立の深まる16世紀において、汎ヨーロッパ的テキストとして読み継がれた。英国では、近年の学説で「隠れカトリック」のレッテルを貼られるAnthony Mundayが、本書の翻訳出版に力を注いだことは興味深い。本発表では、Mundayの騎士道ロマンス翻訳における宗教観および国家観を考察した。
2. 学会発表				
1. A Looking Glass for London and England-2人の預言者の役割-	単	2015年10月	第54回シェイクスピア 学会 於 北海道教育大学函館 校	Thomas LodgeとRobert Greeneの共作とされる劇、A Looking Glass for London and Englandは、1594年から1617年の間に5版を重ねたことから、当時は人気を博した劇であったと考えられる。墮落したニネヴェの都を舞台上から観察する預言者ホセアが、コーラスの役割を担い、場面の合間にロンドンの観客に向かって悔い改めを呼びかける構造は、腐敗したロンドンをエルサレムの崩壊に重ね合わせた当時の数々の説教を彷彿とさせる。劇はホセアの呼びかけとは無関係に進行し、罪深い登場人物たちは雷に打たれ、炎に吞まれて絶命する。一方、預言者ヨナが登場し、聖書の筋書き通りニネヴェに悔い改めを呼びかけると、その言葉はたちまち威力を発揮して劇は大団円を迎える。本発表では、同時代に出版された説教に照らして、これら2人の預言者の役割について考察した。
2. マンデイのロビンフッド劇にお ける古代ユダヤの表象	単	2013年10月	第52回シェイクスピア 学会 於 鹿児島大学	The Downfall of Earl of Robert HuntingtonとThe Death of Earl of Robert Huntingtonは、海軍大臣一座の上演したロビンフッド劇二部作として知られている。舞台設定は、リチャード1世が十字軍に遠征した12世紀末から、その王位をジョンが継いだ13世紀初期のイングランドであるが、主人公の伯爵が劇中でロビンフッドになり代わるなど、史実と虚構がないまぜになった構成から、これまで統一的解釈の難しさが指摘されてきた。本発表では、中世のイングランドを舞台とするこの劇に、古代ユダヤの表象が繰り返し用いられることに注目し、劇の意味を新たな角度から考察した。
3. エリザベス朝散文とその後-18 世紀小説への展開	共	2012年5月	日本英文学会大会 第84回大会 於 専修大学	(全体概要) 18世紀の小説は、リアリズムを特徴とするため、虚構と現実の境界がまだ曖昧であったエリザベス朝の散文との連続性が問われることは従来ほとんどなかった。本シンポジウムでは、こうした定説を覆す形で、エリザベス朝の散文から18世紀小説への連続性を考察した。 (担当部分概要) 現実を描写した18世紀の小説にも様々な語りの工夫が凝らされており、それらの試行錯誤の前例は、エリザベス朝の散文に見出すことができる。本発表では、英国最古の書簡体小説The Image of Idlenessを出発点とし、John Lyly, Anthony Munday, Sir Philip Sidney, Thomas Nasheらの様々な語りの手法に光を当てることによって、これらが17世紀末のAphra Behenを経て、Daniel DefoeやHenry Fieldingの語りへつながることを検証した。
4. マンデイのハンティントン劇にお ける殉教のテーマ	単	2011年9月	関西シェイクスピア研 究会	(発表者名) コーディネーター: 佐野隆弥 メンバー: 原田範行, 本多まりえ, 前原澄子 アンソニー・マンデイのハンティントン劇の第2部では、ジョン王の情欲から身を守るために服毒して死を遂げた、ハンティントン伯爵夫人マチルダの悲劇が展開する。劇の材源には、同時代にMichael Draytonによって書かれた詩Matildaが挙げられるが、マンデイはこの材源を大きく改変した。もっとも重要な変更点は、マチルダを既婚の女性に変え、さらに積極的な殉教者のイメージを重ねたことである。一方、ハンティントン伯爵は、ユダに裏切られたキリストのイメージに繰り返し重ねられる。マンデイの著作では、殉教の問題が繰り返し取り上げられるこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
5. ロマンティック・リバイバルー 騎士道ロマンスとエリザベス朝文 学	共	2009年10月	第48回シェイクスピア 学会 於 筑波大学	とを併せて考えると、本劇も一種の殉教者劇と見な すことが可能である。 (全体概要) エリザベス朝騎士道文学を大衆文化のコンテクスト で捉え直し、その文化的意義を再検証する。 (担当部分概要) これまでほとんど論じられたことのない騎士道ロマ ンス劇The Seven Champions of Christendom, Tom a Lincoln, Guy of Warwickに共通する特徴を明らか にし、17世紀の大衆劇場における騎士道ロマンス劇 の上演と受容を考察する。 (発表者名) コーディネーター：竹村はるみ メンバー：井出新, 前原澄子, 森井祐介
6. 『エドワード1世』一書き加えら れた王妃レオノールの筋書き	単	2008年10月	第47回シェイクスピア 学会 於 岩手県立大学	ジョージ・ピールの『エドワード1世』の唯一現存 するクォート版には、ト書きの不備や場面の不整合 が散見することから、本筋との関連性が希薄と見な される王妃の筋書きは何らかの理由による加筆と見 なされてきた。1971年には、G. K. Dreherによって 王妃の罪業に関わる一切の場面が削除され、エドワ ード1世のウェイルズ征服に焦点を当てた簡略版が 復元されている。このように加筆以前のテキスト研 究が進む一方で、現存するテキストについては未だ に納得のいく解釈が示されていない。王妃の筋書き が加筆によるものとしたら、それは当時の観客の需要を 反映するものであった可能性が高く、一考に値する 。本発表では、残酷でプライドの高い王妃レオノー ルの筋書きが初演当時どのような意味を持ち得た かを明らかにすることによって、現存するテキスト の統一的解釈を試みた。
7. トマス・ナッシュの『夏の遺言 』における祝祭と諷刺	単	2006年4月	関西シェイクスピア研 究会	C. L. バーバーが『シェイクスピアの祝祭喜劇』(19 59)年において、この劇を祝祭擁護の劇と解釈してか ら、その見解は多くの批評家によって踏襲されてき た。ところが、この劇が上演された1590年代にはす でに宗教改革も軌道に乗り、民衆の祝祭は下火であ ったはずである。本発表では、「会計報告」という 劇の設定に着目し、この劇が単なる祝祭擁護にとど まらず、貨幣価値の高騰する階級社会の流動性を諷 刺するものであったことを論証する。
8. シェイクスピア時代の劇場	単	2003年1月	明石工業高等専門学校 イブニングセミナー	シェイクスピアが実際に活躍した英国ルネサンス時 代の劇場には、客席と舞台を仕切る幕や精緻な舞台 装置はなく、劇の細部は観客の想像力によって補な われるものであった。また、劇場は当時最大の娯楽 の場であったのみならず、一種のメディアの役割を 果たしていたことを。さまざまな角度から照射する 。さらに、今日のグロブ座での上演についても言 及する。
9. George PeeleのThe Old Wives T ale再考	単	2001年6月	関西シェイクスピア研 究会	劇を構成する7つのモチーフが、すべて登場人物に よる身の上話からなる点に着目し、こうしたモチ ーフのメドレーが、当時流行した滑稽譚の体裁と重な ることを明らかにする。さらに、メドレーがラテン 語でSatura(寄せ集め/諷刺)を意味することを踏ま えて、この劇が当時の滑稽譚にメニッポスの諷刺を加 えて劇化したものであることを論じる。
10. 『パリスの審判』におけるアレ ゴリーの手法—愛と貞潔の対立か ら融和へ	単	2000年10月	第39回シェイクスピア 学会 於 神戸松蔭女子学院大 学	エリザベス女王1世の宮廷で上演されたジョージ・ ピールによる『パリスの審判』は、パリスのヘレン 奪略からトロイ戦争までの神話を題材にした寓意的 作品である。この劇の独自性は、ヘレンを奪ったパ リスが、裁判を経て無罪放免される点にある。これ は、中世の価値観に基づく悪女のヘレン像と、新ブ ラトン主義の言説に基づく善良なヘレン像を撞着的 に表現したものであったことを明らかにする。
11. ロマンズ劇を読む—CymbelineとT he Winter's Taleを中心に	共	1999年10月	第38回シェイクスピア 学会 於 岩手大学教育学部	(全体概要) シェイクスピア晩年のロマンス劇から、『シンペリ ン』と『冬物語』を取り上げ、当時の文化的・社会 的背景に照らしてテキストを読み直し、それらをも とにセミナー形式で作品を再解釈する。 (担当部分概要) ルネサンス期の絵画や文学には、オウヴィッドの ピグマリオンを下敷きにする変身物語のモチーフが 数多く認められる。演劇においても、その例は少な くない。『冬物語』の最終場面でレオンティーズの1 6年の悔い改めに報いる彫像の変身も、その一例とみ なすことができる。さらに、彫像が生身の人間へと 変身を遂げる『冬物語』のクライマックスは、視覚 芸術への関心が高まりつつあった当時の文化背景と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
12. Cymbelineに見る Pax Britannica の幻像	単	1997年10月	第36回シェイクスピア学会 於 福岡大学	深く関わりを持つことを明らかにする。 (発表者名) 司会:末廣幹, メンバー: 阿部かおる, 伊藤洋子, 蒲池裕子, 佐々木和真, 鶴田学, 中村裕英, 前原澄子, 正岡和恵, 真部多真記, 吉原ゆかり シェイクスピアの『シンベリン』の最終場面における古代ブリテンとローマの和平締結が、Pax Romanaを具現することを明らかにする。ローマからブリテンにキリスト教がもたらされ、ローマ法王との断絶を経てプロテスタントの帝国が誕生した歴史的コンテキストと、ロマンス劇特有の劇的効果を踏まえ、シンベリン王のローマ帝国への従属が、さまざまなアンチテーゼを理想的に解決するように描かれていることを指摘する。
13. King Lear and History	共	1996年10月	第35回シェイクスピア学会招聘 Jonathan Bateman教授セミナー 於 京大大会館	(全体概要) シェイクスピアの『リア王』を同時代の文化的・政治的コンテキストに位置づけ、発表者の提供する観点をめぐって討議を行い、作品の新たな解釈を試みる。 (担当部分概要) 『リア王』が御前上演された1606年末の社会背景に注目し、国王一座の座付作家であったシェイクスピアが、リア王のブリテン分割を悲劇的に描くことによって、ブリテン統合を目指すジェイムズ国王へ逆説的賛辞を送った可能性を明らかにする。一方、リアの悲劇は統合政策のプロパガンダを越えて、ジェイムズ国王の絶対主義を根源的に問い直すものでもあった点を併せて提起する。 (発表者) リーダー: 斉藤衛 スピーカー: ジョナサン・ベイト, 蒲池美鶴, 塚本靖, 前原澄子, 竹中昌宏
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. Gillian Woods, Shakespeare's Unreformed Fiction	単	2015年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第36号, p. 6.	書評 シェイクスピアの劇には、『ハムレット』の煉獄をはじめ、宗教改革以前の文化がしばしば色濃く映し出される。近年の批評において、これらはカトリックの視点から論じられることが多かったが、著者はカトリックの枠を越えて、宗教改革以前の種々雑多な要素がドラマをいかに構築し、劇的効果をもたらすかを論じる。膨大な一次資料と広範な過去の批評を踏まえて作品が読み解かれ、作品論の進化を裏づける書である。
2. Meredith Anne Skura, Tudor Autobiography: Listening for Inwardness	単	2011年04月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第32号, p. 8.	書評 「自伝」(autobiography)には、自己の存在を客体化する近代的概念が伴うため、自伝研究はこれまで17世紀以降の著作を対象にするのが常識であった。ところが近年になって、16世紀の日記や旅行記、詩やパンフレットの類いにも、個人の生きた記録(life-writing)を読み取ろうとする動きが活発である。本書もこうした視点に立って、これまで等閑視されてきたチューダ朝の自伝的著作を発掘する。才人の著作のみならず、音楽家の手記や農耕生活を歌ったベストセラーにも光が当てられており、本書が英国初期近代の自伝研究の発展に寄与するものであることは疑いない。
3. Charles Nicholl, The Lodger: Shakespeare on Silver Street	単	2009年 4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第30号, p. 4.	書評 17世紀初頭、シェイクスピアがロンドンのシルバー通りの髪飾り職人の工房に下宿していたという事実は、早くも20世紀の初頭に、ある訴訟記録の発見によって明らかにされた。本書は、この記録から新たに読み取った事実の断片をつなぎ合わせ、劇作家として絶頂期にあったシェイクスピアの日常を軽妙な語り口で掘り起こす。本書はあくまでも広い読者層を対象にした知的娯楽書の類いであり、シェイクスピア研究者の学問的興味を触発する要素には欠けるものの、17世紀初頭の国際貿易都市ロンドンを垣間見せることに成功した名著と言える。
4. 『ウィンザーの陽気な女房たち』における羊飼いの詩をめぐって	単	2008年3月	日本シェイクスピア協会	研究ノート 『ウィンザーの陽気な女房たち』で、マーローの有

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
5. Andrew Hadfield, Shakespeare and Republicanism	単	2008年3月	学会誌Shakespeare News 第47巻第3号 p. 41. 日本シェイクスピア協会 学会誌Shakespeare Studies 第45巻 pp. 45-47.	名な羊飼いの詩が一行だけ詩篇137のそれと入れ替えて歌われる場面がある。従来は、決闘を前にしたエヴァンスの精神的動揺を反映した歌い誤りと解釈されてきたが、この詩が当時メロディーを伴って口ずさまれたことに着眼すると、異なる解釈が可能となる。この劇の道化訳者といえるフォルスタッフのちぐはぐな言動は、「グリーンズリープズのメロディーで詩篇100を歌うようだ」と形容される。すなわち、羊飼いの求愛のメロディーで詩篇137の冒頭を歌うエヴァンズは、ちぐはぐな滑稽さを体現する擬似フォルスタッフであったと考えられる。 書評 エリザベス朝末期の政体に共和主義の萌芽を認めるか否かについて、歴史家の間で長く議論が続いている。本書は、共和主義思想が当時広く浸透していたことを広範な一次資料をに照らして論証し、シェイクスピアの劇や詩にその影響が色濃く映し出されることを読み取る。従来あまり顧みられることのない一次資料に光を当て、シェイクスピア作品の解釈の可能性を大きく広げた点で本書の意義は大きい。
6. Michael L. Hays, Shakespearean Tragedy as Chivalric Romance: Rethinking Macbeth, Hamlet, Othello and King Lear	単	2005年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第26号, p.1.	書評 本書は、シェイクスピアの四大悲劇にイギリス騎士道ロマンスの要素を見出す試みである。シェイクスピアの執筆当時、騎士道ロマンスは根強い人気を保っており、その文化的土壌からシェイクスピアの四大悲劇も創作されたことが、政治・文化的アプローチとは一線を画する立場から、あくまでも作品の解釈に基づいて述べられている。
7. Janet Hill, Stages and Playgoers: From Guild Plays to Shakespeare	単	2003年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第24号, p.2.	書評 中世の民衆劇の伝統を継承し、エリザベス朝の劇でも独白や傍白を通じて観客への呼びかけが多用されたことについては、これまでも議論が重ねられてきた。劇世界を象徴する特定の空間(locus)に対して、観客へ直接呼びかけが行われる場(platea)は、時空の定まらないニュートラルな空間と見なされる。本書は、中世のギルド劇(聖史劇)から初期近代のシェイクスピア劇までを一連の発展経過として幅広く視野に入れた点で斬新な著作である。
8. Susan Wiseman, Drama and Politics in the English Civil War	単	2000年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第21号, p.5.	書評 1642年に勃発したピューリタンの内乱は、ロンドンの劇場を閉鎖に追い込み、18年にわたって演劇活動を不毛にしたが、劇場閉鎖期には、上演の禁止にもかかわらず、数多くの劇テキストが出版された。本書は、これらの作品に注目し、これまで演劇史の空白期間と見なされてきた1642年から1660年を再考する。当時流通したニュースやパンフレットを含む様々な劇テキストを手掛かりに、内乱期の演劇文化が再考される。
9. James Cunningham, Shakespeare's Tragedies and Modern Critical Theory	単	1999年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第20号, p.3.	書評 近年の先鋭な批評理論によって次々に新しいシェイクスピア解釈が生み出される中で、旧来のヒューマニズム批評がともすれば不当に批判される傾向に対して、著者は鋭い疑問を投げかける。本書は、シェイクスピアの悲劇をめぐる近年の主だった批評を網羅的に取り上げて一種のメタ・クリティシズムを行いながら、新旧の二項対立的図式へ陥りがちな今日の批評の在り方を改めて問い直すものである。
10. Andrew Gurr, The Shakespearian Playing Companies	単	1997年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第18号, p.5.	書評 アンドリュー・ガーの『シェイクスピア時代の劇団』は、1560年代から1642年に互って、ロンドンに存在した劇団の歴史を包括的に考証した研究書である。本書の主眼は、劇団の活動と政局の関連性を見直すことにあり、とりわけパトロンの影響力が重要視されている。書評では、著者による最新の資料の活用や近年の新歴史主義批評への目配りを評価する一方、パトロンと劇団の権力構造の単一的な図式には、見直しの余地があることを提言した。
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年04月現在	日本シェイクスピア協会 会員
2. 2016年04月現在	関西シェイクスピア研究会 世話人
3. 2016年04月現在	日本英文学会関西支部 副事務局長
4. 2016年04月現在	日本英文学会 会員